

トマトに対するホルモンの効果

第3報 品種及び環境差について

幾竹正実*・河野清*

IKUTAKE, M. & KONO, K. Effect of the Phyto-hormone on Tomato Fruit Set
3. Difference of the Variety and Cultivated Environment

トマト品種及び生育環境を異にした場合ホルモンの効果がどの様に現われるかを検討したので報告する。

材料及方法；品種は熊本10号，ジューンピンクを用い1月10日に下種し3月23日に簡易温室内に定植した。尙環境を異にする為簡易温室はⅠ梨地，Ⅱ透明

Ⅲ硝子，Ⅳ古ビニールのものを設定した。ホルモンはトマトトーン50倍，トマフィックス100倍液を噴霧処理し対照として無処理区を設けた。試験は1区4株2区制で施行した。

第1表 品種別処理効果（収量1区4株合計）第一花房

品 種	ホ ル モ ン	開花始	收穫始	收 獲 数	收 量	一 果 平均重	空 胴 率	空胴率	一果平均種子数	結果率
		月 日	月 日	ヶ	匁	匁	+	%		%
熊 本 10 号	トマトトーン	4. 17	6. 9	13	1,084	83	+	80	1	65
	トマフィックス	4. 16	6. 6	18	1,165	66	+	30	44	62
	無 処 理	4. 17	6. 11	11	512	47	—	0	98	46
ジュ ー ン ピ ン ク	トマトトーン	4. 10	6. 1	15	885	58	+	60	7	55
	トマフィックス	4. 7	5. 28	10	506	53	+	20	2	56
	無 処 理	4. 8	5. 29	13	470	53	—	0	58	52

結果及考察；1. 品種間差 品種間におけるホルモンの効果は第1表の通りである。

ホルモンの効果は両品種とも結果率，収量の上に認められたがその程度は特に熊本10号に於いて顕著でありこの差は一果平均重に於てさらに明確である。空胴率も品種間では熊本10号が高く，ホルモンの種類については特にトマトトーン処理で高くなつた。この傾向は単為結果率に於いても同様であつた。

2. 環境差について 環境を異にした場合の効果は第2表の通りである。

供試環境中処理区を検討すると硝子（Ⅰ），透明（Ⅱ），梨地（Ⅲ），古ビニール（Ⅳ）の順に成績がよく従つてこの順序で生育に適したものと思われる。ホルモンの効果は各区とも明らかで特にトマトトーンにお

第2表 環境別処理効果
（熊本10号第一花房1区4株合計）

ホ ル モ ン	環 境	開花始	收穫始	收 量	標 準 比
		月 日	月 日	匁	%
トマトトーン	Ⅰ	4. 17	6. 9	1,084	212
	Ⅱ	4. 23	6. 11	1,434	119
	Ⅲ	4. 20	6. 6	980	99
	Ⅳ	5. 2	6. 18	1,285	115
トマフィックス	Ⅰ	4. 16	6. 6	1,115	228
	Ⅱ	4. 25	6. 14	905	120
	Ⅲ	4. 24	6. 10	1,011	102
	Ⅳ	5. 1	6. 20	794	81
無 処 理	Ⅰ	4. 19	6. 11	512	100
	Ⅱ	4. 20	6. 13	752	100
	Ⅲ	4. 23	6. 10	990	100
	Ⅳ	4. 29	6. 20	980	100

いて顕著である。なお環境別には生育に不良な環境程ホルモンの効果は大きく，生育に適した条件下ではそ

* 熊本縣農業試験場

の効果は減殺される傾向にある。

摘要；(1) ホルモンの効果はトマト品種により可成り異なりジューンピンクよりも熊本 10 号に於いて顕著であつた。

(2) 単為結果及び空洞率は両品種に大差が認められなかつたが空洞程度は熊本 10 号に高くまたトマト・トーンを使用したものに多く認められた。また両品種間では畸型果のあらわれ方を異にした。即ちジューン

ンピンクでは先端が尖り熊本 10 号では肩部にヒダを生じた。

(3) ホルモンは各種類とも不良環境下でその効果が大きく生育に適した環境程効果は少なかつた。

(4) ホルモン種類間にはその効果の上に大差を認め難いがトマトトーンが少々高く単為結果、空洞率を高める傾向を認めた。